

CKJS だより

第52号

校長 松平 昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

かわいさゆえに

我が家にかわいい来客がありました。知人夫婦が赤ちゃんを連れてやってきたのです。大人を前に、彼は王様然として狭い部屋を這いまわります。我が家は、てんやわんやの大騒ぎとなりました。

私を含めて誰もが、この赤ちゃんのように世界中の愛情を独占してしまうような至福の時をもったはずです。そして、親の誰もが我が子の姿に目を細め、わかるはずもない言葉を投げかけ、将来訪れるであろう様々な夢の実現に心躍らせたはずです。



しかし、成長という過程で、子どもたちは様々な顔を見せ始めます。幼い間は何をしても「かわいい」で許され受け入れられます。でも、体が大きくなってくると、かわいいだけではすまなくなります。それは、一人の人間として当然負うべき責任の重さを問われるからです。年齢と相応した振る舞いが求められ、それに反すればそれなりの罰を受けることとなります。ですから、この成長過程の子育てを、自立した社会人への準備段階ととらえ、どれだけ変容を遂げさせることができるかが、親の姿勢として問われてくるのです。つまり、子どもたちの自立は親にとって子離れの儀式でもあるわけです。

「薬はみんな毒だと思っていた方がいいね。」親しい精神科医が言いました。どの親も、我が子に毒を飲ませようなどと思うはずはありません。しかし、薬と思って与えたものが毒になる危険性をはらんでいることを親が忘れたら、子どもたちは不幸です。

かわいいと偏愛するだけの親心では、子どもは社会の通念や不条理と本気で対峙することはできません(もちろん愛情を抜きには親子関係は円滑さを欠いてしまいますが)。「鬼神仏心」という言葉があります。時には、愛情を込めながらも厳しく向かい合うことも必要ではないでしょうか。

長い夏休みも終わりました。親子の対話、そして学校ではできない体験ができましたでしょうか? 前期も残り半分となります。子どもたちの健やかな成長のために教職員一同全力でサポートします。これからもご支援ご協力をよろしくお願いします。